

# 稱讚 二二八号

二〇二二年十一月一日発行

「正しく恐れる」大変難しいことかと思われませんが、オミクロン株のような新たな似て非なるものに対しても、これまで通りの予防を続け、労りの思いを持ち続けて参りたいものです。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚 寺  
〒二二一〇〇七五  
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号  
TEL 〇三―五二四二―二〇二五  
FAX 〇三―五二四二―二〇二六  
HP shousanji.com

慶哉、  
樹心弘誓佛地流念難思法海

(慶ばしいかな、  
心を弘誓の仏地に樹て、念を難

思の法海に流す)  
『教行信証』

慶哉、愚禿仰惟、  
樹心弘誓佛地、流情難思法海

(慶ばしきかな、愚禿、仰いで  
惟んみれば、  
心を弘誓の仏地に樹て、情を難

思の法海に流す)  
『浄土文類聚鈔』



今年の本願寺報恩講では、感染対策して少数の出勤・個人参拝が可能でした。

二〇二二年十一月十五日 大速夜法要  
左奥に見えるマスクをした僧侶が住職です

「情念」という言葉があります。親鸞聖人はこの言葉はお使いになっておりませんが、心や思いを表現されるとき、「心」「こころ」「情」「念」を使い分けておられるようです。上記の二つの御文は、同じように思いますが、『教行信証』では、「念」と書かれていますところが、『浄土文類聚鈔』では、「情」を書かれております。「ねん」「じょう」と読むのか、「おもい」とか「こころ」と読むのかは、私はよく分かっておりませんが、違う字が当てられているのは、それぞれ意味するところがあるからだろうと思います。

私自身のこころは、どこまでも煩惱だらけの「情」なのでしょう。そういう私のこころには、「念」(阿弥陀様のおこころの「南無阿弥陀仏」)が、いつも一緒に居てくださっていると、念仏申す身にならせていただいた者には、自然に味わえるのとこととでありましょう。私の「情(こころ)」に常に寄り添ってくださる阿弥陀さまがいらいらっしやると心がけ、お念仏申して参りたいものだと思います。

# 現世利益和讃について

## 一首目

あみだによらいらいけ

### 阿弥陀如来化して

来りてあはれみたまふ

そくさいえんめい

### 息災延命のためにとて

七難をとどめ いのちを延べたまふなり

こんこうみよう

### 『金光明』の「寿命品」

じゆりようほん

### ときおきたまへるみのりなり

『浄土真宗の教章（私の歩む道）』の「生活」には、

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歓喜のうちに、現世祈禱などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

と述べられてありますように、浄土真宗では、現世利益を願う求める宗教ではないと聞き習って参っております。

『教行信証』では、「現生の利益十種」が述べられておりますが、「現世（利

益）」の意味での言葉は「一か所しか使われ  
ておりません。「行文類」で善導大師の  
『往生礼讃』から「問うていはく、阿弥陀  
仏を称念し礼観して、現世にいかなる功德  
利益があるやと。」「答えていはく、もし  
阿弥陀仏を称すること一声するに、すなは  
ちよく八十億劫の生死の重罪を徐滅す。礼  
念以下もまたかくのごとし。・・・」と引  
用されているところ。またこの御文は

『仏説観無量寿経』（下品下生）の「善友  
告げていはく、（なんぢもし念ずるあたは  
ずは、まさに無量寿仏を称すべし）」と。か  
くのごとく心を至して、声をして絶えざら  
しめて、十念を具足して南無阿弥陀仏と称  
せしむ。仏名を称するがゆゑに、念々のな  
かにおいて八十億劫の生死の罪を除く。」  
に依ります。

「現世利益」と「罪の徐滅」の関連性を  
今のところ、私自身はわかっておりません  
が、私自身は、現世利益そのものを否定し  
ていたと思つていましたが、親鸞聖人があ  
えて「現世利益和讃」を十五首も詠まれた  
のか、そして親鸞聖人が仰る「現世利益」  
とは何かを伺つてみたいと思ひます。

「現世利益和讃」は、『浄土和讃』の中  
で、「讚弥陀偈讚」（四十八首）、「浄土和  
讚」（『大経』意（二十二首）・『観経』  
意（九首）・『弥陀経』意（五首）・諸経  
のこのころによりて弥陀和讃（九首）・「現  
世利益和讃」（十五首）・『首楞嚴経』に

よりて大勢至菩薩和讃したてまつる（八  
首）に編纂されたものに含まれています。  
第一首目を伺つてみます。現代語訳では  
「阿弥陀如来は、この世にあらわれて苦惱  
の衆生を憐れんで天災地変など種々の災難  
を息めたり命を延ばすために『金光明経』  
の「寿命品」を説き残し、現世の利益を示  
してくださいました。  
（『浄土和讃を読む』白川晴顕氏著）  
となりませう。

「来化」とは、左訓に「来たりてあはれ  
みたまふ」とあり、阿弥陀如来がこの世に  
あらわれて私たち衆生を憐愍することを言  
ま  
す  
「息災延命」とは、左訓に「七難をとど  
めいのちを延べたまふなり」とあり、七難  
の災難をはずめ、命を延ばすことを言いま  
す。「七難」とは、『法華経普門品』では  
火難・水難・羅刹難（悪霊の難）・刀杖難  
（刃物などの難）・鬼難（死霊の難）・枷  
鎖難（牢獄に捕らわれる難）・怨賊難を言  
いますが、経典によつて、異なります。察  
するに、天災・疫病・人災等々様々な生き  
るのに苦しいこと、最終的に死に遭うこと  
を指していると思われませう。

「延命」は現代医学の延命治療も含めて  
私たちは健康で長生きしたい、死にたくな  
いと言う本音を表わしていると思ひます。  
『金光明（金光明最勝王経）』は、日本におい

ては、『法華経』『仁王経』とともに護国三部経の一つに数えられ、持統天皇はこの経を諸国に下され、毎年正月に読誦せしめて国家の平安を祈らし(六九八年)、聖武天皇は『金光明最勝王経』を写経して全国に配布し、天平十三年(七四一年)には全国に国分寺を建立して、金光明四天王護国之寺と称されたとのことです。そして親鸞聖人の時代、争いが絶えず、関東在住の折りも幾度となく災害に見舞われたと思います。科学医療も発達していない時であり、ご消息の「なによりも、こそ・ことし、老少男女おほくのひとびとのしにあひて候らんこそ、あはれにきこらへ」の「こそ」は正嘉二年(一二五八年)に、前年に地震があり、正嘉の飢饉が発生しました。同年に正元に元号を変えましたが、疲弊は増大するばかりで、「こそし」(文応元年(一二六〇年)に諸国の寺社に大般若最勝仁王経等を転読せしめる教書を発せねばならない状態だったとのこと)です。権力側も民衆も天変地異が収まることを切に願っていた時代でありました。護国が説かれているということは、社会が平安であることを願っているということでありますから、『金光明経』も活用されたことでありましょう。

「息災延命の利益」が説かれていると言われる『金光明経・第二・寿量品』には、王舎城に信相という在家の菩薩がおりました。釈尊がやがて亡くなられると聞いて、いぶかしく思いました。「仏は、不殺生と食べ物に他を施すことが、長生きする道であると教えられた。

仏ほど生き物を憐れみ、長い過去の世に限りなくその身を衆生に施された方はない。それなのに、何故わずか八十年ほどの短い命しかないのであろうかと。すると、東西南北の四方にそれぞれ阿闍仏・無量寿仏・宝相仏・微妙声仏が宝華に乗ってあらわれ、「信相よ、そのように思うてはならない。釈迦牟尼仏の寿命は限りがないので有る。八十年で亡くなられるというのは、お慈悲をもって、仮に示されるのである。そのわけは、いつまでもこの世に生きておいでになれば、衆生はいつでも聞くことができると思つて、法を聞こうとしないから、いそいで聞かねばもう聞けないと覚らせるために、亡くなられる姿をお見せになるのだ。仏の寿命は無量寿である」と説き聞かせられました。それで、信相も釈尊のもとに参つて、不審をお尋ねするというのです。その不審とは、信相はあるとき、夢に金の太鼓を見ました。日光の炎のように、その金の光が輝くと、その太鼓から仏の説法が流れ出て、神主さまのようなものが、太鼓をどんどんとならしていたというのであります。

〔現世利益和讃〕蓬茨祖雲師著  
と意識されています。仏の寿命が無量であることは説かれています。が、「息災延命」のことは直接説かれていないように思えます。国立国会図書館所蔵の『金光明最勝王経如来寿量品』栖川興嚴氏刊行(明治九年)※写真には、



「無病息災延命」の言葉がでてくるのです。

蓬茨師は、先の金の太鼓について、「仏の説法は、三千大千

世界の苦しみ、災厄を滅し、一切衆生を無量寿に帰せしめるということにつくされます。これを平凡なことばでいえば、息災延命ということになります。われわれ凡人は、いつも息災延命を願つて生きておりますが、それを表わすのが祭りの太鼓ではないでしょうか。そういう我々が、無量寿如来の本願に帰せば、無始よりこのかたの災厄、三千大千世界の苦難が滅し、無上涅槃の証りに入られると、親鸞聖人は示されたのであります。」と解説されておられます。

親鸞聖人は、比叡山で同じく重要視された『法華経』の「寿量品」を採用しなかつたのでしょうか?そこには、「自我憫」として仏が自ら衆生を救済するために仮に釈迦仏として姿を現わしたのであり、「久遠実成の仏」であると説いてあります。自画自賛?

一方、『金光明経』では、四方の如来が一起来(釈迦仏)の寿命は無量であることを説きます。私はこの光景は『仏説阿弥陀経』の「六方段」を思い起こします。東西南北・上下の全世界の諸仏方が一様に念仏する者を護念しておられるに似ていると思えました。寿命無量は阿弥陀如来であり、全ての仏方が阿弥陀如来の無量のはたらきを讃歎していると親鸞聖人は受け取られたのでしよう。

災害・飢饉・疫病が続く現世においてこそ、阿弥陀さまの本願の救いがはたらいていることを具体的に明らかにされようとなさっているように思えます。

# 令和三年度 稱讚寺

## 親鸞聖人報恩講

### ご案内



染対策をしていただき、ご参拝いただきたく、次のようにご案内いたします。

### 〈日時〉

十二月十九日（日）午後一時

### 〈日程〉

一三：〇〇 おつとめ

一三：四五 休憩

一四：〇〇 おはなし（住職）

一四：四五 休憩

一五：〇〇 解散（恩徳讃）

※ご出欠の確認はいたしませんこと  
をご了承ください。

昨年は新型コロナウイルスの第三波の渦中、報恩講を執り行わさせていただきました、六名の方がご参拝くださいました。  
現在、感染は減少しておりますが、海外では増えているところもあり、新たにオミクロン株が発生したり、第六波も起こると懸念されます。  
本年も報恩講で、皆様の元気なお姿を拝見できればと思いますが、これまで通り感



去る十月三十日（土）、田中悦子さんのご伴侶（法名釋祐悠 田中祐輔様）の築地本願寺合葬墓へのご納骨法要を築地本願寺の読経室で執り行いました。

午後二時からの開始の予約でしたので、先に食事をしておきましようと言うことで、十二時過ぎに受付に参って、ご遺骨を預かってもらい食事しようと思いましたが、早過ぎたうえ、預かってもらえませんでした。（ご遺骨を持ったまま紫水にて食事）

午後二時前に受付会場に参り、読経室に案内してくださいました。こじんまりとして、お仏華も綺麗に荘厳なされていましたが、香は焚かないようになっていました。（お焼香は出来ません）

読経が終わり、境内にある合葬墓へ案内され、職員さんのお手によりご納骨されました。

お父さまがご往生なされてからコロナの影響もありご納骨が先延ばしになっておりましたが、受付からの丁寧なご案内もあって田中さんご家族もご安堵の様子でした。



## 親鸞聖人を知ろう

### 恵信尼の結婚

ということになりますと、恵信尼は京都に住んでいた貴族の娘で、法然を仲立ちとして親鸞と結婚したのではないかと考えられます。ですから恵信尼は、法然門下のたいへんすぐれた若手の僧侶としての親鸞を前もって知っていたと考えて間違いないと思います。もちろんその当時の貴族の娘ですから、恵信尼が親鸞と口をきいたことがあったかどうかということは問題外です。いずれにしても、恵信尼は全然知らない人と結婚したということではなく、知っていたということだと思います。しかも結婚生活のはじめから夫を尊敬できていたと思われます。

ただ、僧侶は異性とは関係を持つてはいけないという戒律が存在していました。これを不淫戒ふいんけいといいますが、隠れて関係を持つ僧侶はいたしても、それはあくまでも公には隠さなければいけないものでした。鎌倉時代の『沙石集』に「せぬは仏、隠すは上人」とあります。この場合の仏とは、仏像のことです。その不淫戒を押して結婚することに、恵信尼が悩まなかったとは思われません。このような問題は残ります。親鸞と恵信尼の結婚生活は、いうまでもなく貴族風だったでしょう。つまり、毎日の生活の面倒は恵信尼の侍女たちがみるのです。脇田晴子氏が『日本中世女性史の研究』のなかでい

れているように、貴族の女性たちは働かないのはもちろん、御簾みすのなかについて顔を見せず、人にかしずかれなければならぬものとされてきました。

したがって貴族の娘たちは日常の家事を切り盛りする能力を持っていませんでした。それ自身につけるようには教育されていなかったのです。彼女たちは、例えば、ご飯を作ってはいけないのです。結婚してからも、夫のそのような日常の世話をしてはいけないのです。それははしたないことで召使の女の人のするべきことでした。もちろん育児もしません。乳母がするのです。

恵信尼は、その後、京都・越後・関東で子どもたちを数人育てることになります。これは非常な努力だったと私は思いますね。恵信尼はご飯の作り方や育児のすべてを知っていたはずがないのです。しかし結果的にはそれを全部、おそらく努力して学び身につけて、それで立派に子どもたちを育てたのです。もちろん夫の世話もしたのです。恵信尼というのはそのような、いま自分は何をすべきかについて、状態に応じて判断のできる賢い人だったと思うのです。

### 越後国への流罪

恵信尼は結婚当初、親鸞と一緒に生活をずっと続けていきたいと思っていたことでしょう。なにせ尊敬できる人として以前から知っていたことでしょうから。しかし恵信尼が二十六歳のとき、親鸞は越後国に流されることになってしまいました。それからのことについては、今日の私どもと考えかたの違うところがあります。

どこが違うかと申しますと、鎌倉時代は住む場所が違ったならば夫婦関係が切れても当然であったのです。ですから親鸞が越後国に流されると決まったときに、恵信尼は別れてしまってもおかしくなかったのです。今日風にいえば離婚です。離婚しても誰に咎とがめられることもありません。親鸞は越後国でまた奥さんを見つけることになりました。見つけるつもりがあればですが。当時はそのような社会だったのです。

しかし恵信尼は親鸞について行くことにしたのです。つまり、ついていく道を自分で選択してくれます。今までもおりの生活水準が維持できます。京都に比べれば越後国の生活水準は低かったでしょうね。まして流人となっていくのです。貴族の娘ですから「嫌です、ついて行きたくありません」といっても誰も文句はいいません。しかし恵信尼はついて行ったのです。

恵信尼はどうしてそのように決心したのでしょうか。推測すれば、夫として魅力ある親鸞だったからではないかと思えます。

「一緒に行きましよう。それだけの価値がある夫ですから」と。「越後国へ行ったらもしかしたら自分でご飯を作らなければいけないかもしれません。でも、やりましよう」ということなのでしょう。これを現代風にいえば、恵信尼二十六歳の決断ということになります。

### 三 関東時代の恵信尼

#### 関東への移住

親鸞は四十二歳のときに一家をあげて越後から関東へまいります。関東での生活の中心は

常陸国です。ご承知のように、親鸞がなぜ関東へ行こうとしたかということについては、  
さいしゆきようじゆうえし

『最須敬重絵詞』に、

事の縁ありて東国にこえ、

とある程度のことしか知られていません。詳しいことはわかりませんが、親鸞が関東へ移ろうと決心したとき、恵信尼は三十三歳でした。結婚してから十年くらいたっています。

このとき、関東へ行こうと強くいつたのは恵信尼ではなく親鸞であったことは、まず間違いないですね。念仏布教のためでしょうか。でも恵信尼に立場からすると複雑なものがあつたはずで、「私はもうけっこうです。京都へ帰って貴族の普通の生活に戻りたいのです。子どもたちにも教育を受けさせたいのです。あなたにはこの田舎で十分に尽くしました。関東へ行きなければお一人でぞうぞう」という選択肢もあつたはずで。

昔は現在のように役所へ婚姻届を出しているわけではありませんから、別ればそれはそれでそれつきりです。私は恵信尼は悩んだと思うのです。「越後からまた関東へ行くのか。これから生活はどうなるだろう。また、ことばも違う」。

私も茨城県に住んで二十三年になります。正直いって最初のころは地元の方のことばがよくわかりませんでした。勤務先の茨城大学へ行っているかぎり（今は筑波大学ですが）共通語ですみます。しかし外へ出ると、特に農村部ではことばはわかりませんでした。恵信尼にしてみても、それをどうしよう、という心配があつたはずで

恵信尼は結婚して十年くらいたっていますから、もう結婚生活とはどのようなものかわかっていたと思います。皆様、妻でも夫でも、お互いに十年たてばわかりますねいくら親鸞が偉いと思つても、「越後国へついてきただけだつてたいへんだつたのにまた関東へ一緒に行くなんて、もう勘弁してほしい」と恵信尼が思つても仕方がなかったと私は思うのです。そう決心したとしても、誰も恵信尼を責めることはできないと強く思います。

### 常陸国下妻での夢

しかし、恵信尼は三十三歳のときに関東へ入ったばかりのところで新たに決心し直した、と私は思っております。それは親鸞を人生の同伴者としてもう一度選び直したということなのです。「この人と一緒に生きていこう」ともう一度決心したので、そのことが恵信尼の同じ手紙のなかに出てくると私は考えております。その手紙には、親鸞・恵信尼一家が関東へ来て常陸国の下妻の幸井の郷という所へ行つたとき、恵信尼は夢を見たとあります幸井というのは、現在は坂井と表記しています。茨城県下妻市坂井です。

鎌倉時代は、もっと広くいって中世は、夢というのは現実のことでした。架空のことではなく、ほんとうにあることと考えられていました。夢と現実の区別はつきませんでした。つけようとしなかった、というのが正確なところかもしれません。そのころには、夢を見たらすぐ書き留めておかなければいけないと考えている人もいました。しかし文字が書けない人も多かったはずで、そういう人はどうするんだ

ということにもなりますが、夢を書き留めておかなければいけないというのは、文字を書ける知識人の考えでしょうね。

恵信尼の夢は次のようなものだったそうです。新しい阿弥陀堂が建てられていて、その落慶法要と申しますか、堂供養の準備がされている。そしてそれは夜のことで、宵祭り、つまりは堂供養の前夜祭らしい、と恵信尼は夢のなかで思っているのです。お堂は東向きに建つてい

たいまろ

て、そこに松明があかあかと燃えている。お堂の前には鳥居のようなものが立っている。お堂の前に鳥居が立っているのは変なのですが、とにかく鳥居が建つていて、その横棒のようなものに二体の仏の絵が掛かっている。一体は仏の頭光のようにただ光っているだけで顔の様子はわからない。もう一体はちゃんと顔がある。不審に思った恵信尼は夢のなかで質問したので、「あれはいったいどなたでしょうか。どういう仏様でしょうか」。そうしましたら、誰ともわかりませんが答えてくれる人がいました。

あの光ばかりにてわたらせ給は、あれこそ法然上人にてわたらせ給へ。勢至菩薩にてわたらせ給ぞかし

「あの光ばかりのかたは、あれこそ法然上人です。勢至菩薩の生まれ変わりですよ」と答えがありました。法然は多くの人びとに尊敬されていて、存命中から、勢至菩薩の生まれ変わりであるという説がありました。阿弥陀仏の生まれ変わりであるという説もあつたのですが、勢至菩薩の生まれ変わりであるという説の方が広まっていました。

勢至菩薩というのはいったいどのような菩薩かといいますと、阿弥陀仏が持っている智慧、人生を見とおす智慧、宇宙を見とおす智慧、どうすれば一生をよりよく生きていけるか、そういう智慧を形に表わしたものです。それが勢至菩薩なのです。人間のような姿をとっています。が、あれは私たちがいかに生きていったらいいかということの形に表わしたものです。「智慧の光」という表現もありまして、智慧は光で表現することもあります。絵像ですとよくわかりますね。それでお顔がわからない光だけの姿が勢至菩薩、つまり法然ということになるのでしょう。

阿弥陀仏のもう一方の脇侍である完納菩薩は、それに対して、慈悲の働きを表わすといわれております。阿弥陀仏の慈悲の力です。余談であります。私も日本人というのはかなりいい加減なところがありまして、「慈悲」についてもおおざっぱにとらえてきました。皆様、「慈悲」とは何でしょうか。慈悲とは本来何でしょうかと問われたときに、どう答えますか。慈悲は慈悲ですよ、大事にしてあげるとか、そういうことですよ、というような返事になってしまいませんか。しかし、そうではないのです。

本来、「慈悲」は「慈」と「悲」とから成り立っています。「慈」とは慈しむという字で、「悲」は悲しいという字です。この二つは意味が違います。どのように違うかといいますと、慈というのは困っている人がいたときに、何か差し上げて救ってあげることです。苦しんでいる人、泣いている人、困っている人に、その人が求めている物をあげるのです。それが「慈」

です。悲は逆の働きです。相手の苦しみを自分の苦しみとして受け取ってあげる。相手の悲しみを自分の悲しみとして一緒に泣いてあげる。それが「悲」です。これは人間生活ではとても大事なことだと思えます。相手のために特に何ができるわけでもなくとも、苦しんでいる、困っている人の話を聞いてあげる。聞いてもらうだけで気持ちよくなるということがあるのではありませんか。この働きが「悲」です。

このように、本来、「慈」と「悲」とは違うのですが、日本人はこういう部分についてはあまり細かく考えません。まあいいではないかということまで今日まで来てしまいました。しかし、「慈悲」は大切にしてきたと思えます。この慈悲を形に表わしたのが観音菩薩です。

恵信尼は、光としての法然のことを知った上で、こんどは顔がある仏の絵像について「あれは何という仏様でしょうか」と尋ねたのです。するとまた空中から返事がありました。それは

あれは観音にてわたらせ給ぞかし。あれこそ善信の御房よ

「あれは観音様です。あれこそ親鸞さんですよ」という返事だったので。善信といのは親鸞のもう一つの名前です。この返事を聞いた恵信尼は、はっとびっくりするわけですね。それで、

うちおどろきて候しにこそ、夢にて候けりと手紙には書いてあるのです。

「うちおどろきて」というのは、打たれたように驚いた、という意味です。「おどろい」というのは確かに驚いたのですけれども、昔の人の「おどろい」というのは現在とは多少意味が違います。はっと目がさめることを驚

くといったのです。はっとびっくりしていきなり目がさめるのを、昔の人は「おどろく」といったのです。「あれこそ善信の御房よ」といわれて、そうだったのかと思ひ、感動して目がさめたということなのです。そしてそれだけではなく、この夢には恵信尼のそれからの生活にあって重要な意味があったと思うのです。

親鸞は観音菩薩の生まれ変わりであるということがわかりました。その親鸞は、阿弥陀堂の前に、勢至菩薩の生まれ変わりである法然と一緒に並んでいるのです。恵信尼は親鸞のことを尊敬していたでしょうけれど、しかし、もともと念仏の教えを始めに受けたのは法然からです。それに親鸞も、おりに触れて法然に対する尊敬のことばを口にしていたでしょう。その法然と同じ立場にいるのが自分の夫である親鸞。そうだったのか。恵信尼は、自分の夫は尊敬する法然と同じ立場といえる観音菩薩の生まれ変わりであったのか、と関東の入り口で思い知るのでした。

では、なぜ関東の入り口でこのような夢を見たのでしょうか。下妻は常陸国ですから、厳密にいえば越後国から関東に入るさいの入り口とは違いかも知れません。どのようなコースで越後国から関東へ来たかにもよりますが、でも、関東へ入るについての入り口といつてよいと思えます。あるいは関東へ入ってから逡巡し続けた恵信尼、という解釈もできると思えます。しかし何の悩みでしょうか。

(次号に続く)

## 稱讚寺 行事予定

### 二〇二一年 十一月の行事予定

五日(日) 日曜礼拝 休座

六日(月) のんのん法話会 午後二時

一二日(日) 日曜礼拝 休座

一六日(木) のんのん法話会 午後二時

一九日(日) 日曜礼拝 午前十時

### 親鸞聖人報恩講 午後二時

二六日(日) 日曜礼拝 午前十時

のんのん法話会 午後二時

※毎朝七時 おあさじ

※毎夕六時 おゆうじ

## 「おかげさままで」と

としく

## 年暮れる

二〇二一年「心のともしび」十二月カレンダーより

### 二〇二一年 十二月の行事予定

六日(木) のんのん法話会 午後二時

九日(日) 日曜礼拝 午前十時

一六日(日) 日曜礼拝 休座

のんのん法話会 午後二時

御正忌報恩講

二三日(日) 日曜礼拝 午前十時

二六日(水) のんのん法話会 午後二時

三〇日(日) 日曜礼拝 午前十時

### 二〇二二年 一月の行事予定

六日(日) 日曜礼拝 午前十時

のんのん法話会 午後二時

一三日(日) 日曜礼拝 午前十時

一六日(水) のんのん法話会 午後二時

二〇日(日) 日曜礼拝 午前一〇時

二六日(土) のんのん法話会 午後二時

二七日(日) 日曜礼拝 午前一〇時

## 編集後記

日本では、新型コロナウイルスの感染が収まりつつある一方、世界では再び拡散しています。また、新たにオミクロン株が世界中で発生し日本にも入ってきました。私は、最近、二回、マスクをするのを忘れたことがあります。一つ目は、車で途中コンビニに寄ったとき店に入り会計して車に戻った時、していないことに気づき、慌てて家に帰り、出直したことがあります。一つ目は、自宅にお参りに行ったとき、少し離れたホームセンターの三階の駐車場に車を止めて、外に出たところで、マスクをしていないことに気づき、袂から慌てて取り出して着けたことがあります。なんか、気が緩んでいることの現れかなと思います。そういう折り、テレビでアナウンサーの方が「正しく恐れる」ということを呼びかけておりました。この言葉は、既に今年初めにインターネットでも掲載されていました。東大講師の内田麻里香氏が「東日本大震災から十年、新型コロナウイルスの感染が国内で確認されてから一年経つ。この間、「正しく恐れる」という言葉を、数多く目にした。」と。そしてこれは寺田寅彦氏の随筆『小爆発二件』から引用された句で、「ものをこわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正當にこわがることはなかなかむずかしいことだと思われた」とあり、この全文を読めば、寺田ほどの科学的知識、科学的思考力を持つ者でも、正當にこわがることは難しいという述懐であると解釈できる。しかし、いま使われる「正しく恐れる」という言葉は、自分と感覚が異なり「こわがりすぎる」と思われる者に向けて、「あなたのリスク認識は歪んでいる」という、非難の意味合いをもって使われているように見えるとコメントしていました。十二月四日から十日まで「人権週間」である。情報過多の中、正しい情報を聞き分けられるようにしたいと思います。先の私の愚行はそれ以前の問題ですが